中国貨幣の歴史

26　宋代の貨幣④―地域的通貨としての鉄銭の流通―

四川

（銅銭）

（鉄銭）

宋通元宝（そうつうげんぽう）
（一文銭）

景徳元宝（けいとくげんぽう）
（当十銭）

祥符元宝（しょうふげんぽう）
（当十銭）

四川では、宋初から銅および鉄の一文銭（小平銭）が発行され、鉄銭専一化のために銅銭を回収する過程では、1/10 にまで鉄銭の価値は下落した。銅銭の回収がほぼ完了すると、十文相当の大型の鉄銭も発行されるが、その重量は 13～17 g 程度と一文銭（3 g 前後）の 4～5 倍程度であった。

陝西・河東

（銅銭）

（鉄銭）

皇宋通宝（こうそうつうほう）
（一文銭）

（銅銭）

（鉄銭）

慶曆重宝（けいれきじゅうほう）
（当十銭）

至和重宝（しわじゅうほう）
（当三銭）

熙寧通宝（きねいつうほう）
（折二銭）

陝西・河東では、銅銭とともに、鉄の一文銭、当十銭も鋳造・発行された。鉄銭の価値は銅銭に対して下落した。また当十銭はその貨幣価値に対して重量が軽いため私鋳を招き、当初の十文から価値が下落し、二文（折二銭）となってようやく流通が安定した。

（表記のないものは鉄銭）

宋は、斉一な銅銭による通貨統一を実現するが、統一過程において、四川では鉄銭のみを流通させる政策を進めた。また、陝西・河東では、西夏との交戦に伴う銅銭の不足を補填するため、銅銭とともに鉄銭を併用させた。鉄銭は、銅銭との比価変動や大銭の私鋳などの混乱を招来しながらも、地域的通貨として流通した。

（写真は実物 × 100％）

宋は、斉一な銅銭の大量鋳造・発行によって銭貨統一を実現したが、四川（しせん）や陝西（せんせい）・河東（かとう）といった一部の地域において、地域を限定して鉄銭を鋳造・通用させた。

四川では、五代十国時代末の「後蜀（ごしょく）」（934～965 年）での旧制を承け、宋建国当初（960 年）より銅銭とともに鉄銭（「宋通元宝」などの一文銭）が鋳造・発行され、中国再統一（979 年）前の開宝 3 年（970 年）には鉄銭専一化の方針が打ち出された。これは、全土への銅銭供給が急務となる中、地理的・経済的に独立性が高い四川地域では鉄銭化を進め、銅銭の供給を他の地域に振り向けて、銅銭による銭貨統一を早急に推し進めようとしたものと考えられている。四川では、11 世紀初には銅銭を回収し鉄銭専一化が完了するが、銅銭回収過程では、1 : 1 の銅・鉄銭の公定比価（銅銭 1 文に対する鉄銭の文数）が市場で 1 : 10 になるなど鉄銭価値が下落し混乱を招いたとされる。専一化完了により銅・鉄銭の比価が消滅すると、それまでの一文銭の鉄銭のほかに、十文相当の大型の鉄銭（「景徳元宝（当十銭）」ほか）も発行された。四川では、鉄銭の価値下落やそれに伴う現金搬送負担、慢性的な銭貨不足の中で、宋初に金融業者が発行した手形「交子（こうし）」が流通するようになり、その流通状況をみた政府は発行権を独占し、紙幣として発行するようになる。

「西夏（せいか）」（1038～1227 年）と接する陝西地域では、建国から 80 年を経た慶暦元年（1041 年）、西夏との交戦本格化に伴い、軍費として支出すべき銅銭不足を補填するため、銅銭とともに鉄銭（「慶暦重宝（当十銭）」、「皇宋通宝（一文銭）」）が鋳造・発行された。原料コストが安い鉄銭の鋳造は、政府に鋳造利益をもたらす一方で、銭貨流通を混乱させる。陝西地域では、四川と異なり銅銭と鉄銭の併用を前提としたほか、一文銭に加え当十銭の鉄銭も発行されたため、銅・鉄銭の比価変動に加え、貨幣価値に対し重量の軽い大銭の私鋳盛行により貨幣流通は大いに混乱した。1 : 1 と定めた当初の銅・鉄銭の比価は 1 : 3 へと下落し、当十銭の貨幣価値も当十（十文）から当五（五文）、当三（三文）へと改めざるを得なかった。嘉祐 4 年（1059 年）に当三を折二（せつじ）（二文）に、また銅・鉄銭の比価を 1 : 2 に改めることで、大銭の私鋳は終息し、銅・鉄銭の流通も安定した。なお、陝西地域に隣接する河東地域では、陝西への鉄銭供給を主たる目的として、鉄銭導入初期に大銭を中心に大量に鋳造したが、西夏と和議を結び（1044 年）、所期の目的が達成されると短期間で鋳造は中止された。

北宋の時代においては、統一通貨である銅銭の全国流通を基本として、いわば地域的通貨として鉄銭が限定的に流通する形がしばらく続くが、北宋末の八代徽宗（きそう）（在位 1100～1125 年）の時に宰相となった蔡京（さいけい）によって、夾錫銭（きょうしゃくせん）と呼ばれる新たな鉄銭が鋳造される。夾錫銭は、北方で対峙する西夏や「遼（りょう）（契丹（きったん））」（907～1125 年）が宋の鉄銭を溶かして武器に転用することを回避するため、鉄に錫を混ぜて鋳造したもので、従来の鉄銭より脆く質が劣るとされる。夾錫銭は、当初は陝西・河東地域に導入されるが、原料銅の生産減少により銅銭鋳造量が激減する中で、政和 3（1113）年に全国への流通拡大も試みられた。しかし、貨幣流通は大きく混乱して蔡京の通貨政策は失敗に終わり、政権の弱体化が加速し、北宋は 1127 年に女真（じょしん）族の「金」（1115～1234 年）によって滅ぼされる。

［山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館］

［参考文献］

加藤繁、『中国貨幣史研究』、東洋文庫、1991 年
日野開三郎、『日野開三郎　東洋史学論集　第 6・7 巻　宋代の貨幣と金融（上）（下）』、三一書房、1983 年
宮崎市定、『宮崎市定全集　第 9 巻　五代宋初の通貨問題』、岩波書店、1992 年
宮澤知之、『中国銅銭の世界―銭貨から経済史へ―』、思文閣出版、2007 年
――――、『宋代中国の国家と経済』、創文社、1998 年